

興味 深人

インタビュー

福祉医療問題を追うジャーナリスト おおくま大熊 ゆきこ由紀子さん

■「寝たきり老人」に違和感

福祉や医療分野の改革をペンで訴えてきた元朝日新聞社論説委員の大熊由紀子さん(85)は「言葉は魔術」という。同紙の紙面で、日本の「寝たきり老人」の多くは「寝かせたきり」にされた「犠牲者」と指摘するなど、国の施策にも影響を与えてきた大熊さん。言葉は、見えていなかったものを気付かせる一方、時に「本質を隠す」ところもある。とも。記者時代のみならず退社後含め、60年以上にわたりジャーナリストとして活躍する大熊さんにあるべき社会保障の姿を聞いた。

—「寝たきり老人」に違和 付きました」
—敬老の「感」を覚えたきっかけは。

「1984年、厚生省は『2000年に寝たきり老人が100万人になる』と恐れている日常語がない」（要約）と書きました。

「当時、論説委員になって1年目。記者時代は科学部で化学や医療を担当していたため、福祉分野は勉強中でした。こんなふうに断定してよいのか」と通じたんですね。

というに通じたんですね。

「会った女性ば、車椅子に腰掛け、ワンピース姿にイヤリング、マニキュアもしていました。半身不随でしたが、おしゃれでした。日本のお年寄りば、起こしてもらえない『寝かせたきり』なのだど気が、本当にこわむ書きました。専門家に反発を受けました。その後、厚生省が89年にゴールドプランをつくつて『ねたきり老人ゼロ作戦』を盛り込み、90年には『寝たきりゼロへの10カ条』を公表。

「付きました」
—敬老の日の1面の大型コ

ラムで「高齢社会の先輩国で
は『寝たきり老人』に対応す
る日常語がない」（要約）と
書きました。

「当時論説委員になって
1年目。記者時代は科学部で
科学や医療を担当していたた
け、福祉分野は勉強中でした。
こんなふうに断定してよいの
か、本当にこう書きました
したが、その後、厚生省が89
年にゴールドプランをつくっ
て『ねたきり老人ゼロ作戦』
を盛り込み、90年には『寝た
きりゼロへの10力条』を公表。

言葉は魔術 本質見抜き社会変える

「国の政策に反映されました」
— 一つ、言葉の力に気付いたのですか。

「科学部時代に、医師の話
をわかりやすくするため、『コ
レステロールに『善玉』『悪
玉』と名付けた記事を書きま
した。この言葉が広く知られ
るようになったことで『言葉
は魔術』と思いました。言葉
を変えることで、人の心や世
の中も変わるんだなって」

—北海道では、精神障害などを抱えた人の活動拠点「浦河べてるの家」（日高管内浦河町）を取材しました。

『幻聴を自慢する』『幻覚と妄想大会』などユーモアいっぱい取り組みに出合い、感動しました。これまで取材してきた精神科病院と全く違う文化でした。精神障害の体験を『当事者研究』する試みににも驚きました。00年に杜説で『21世紀を先取りする』取り

組みとして紹介しました。はてるの家がまいた当事者目線「種」は、広がりつつあると感じています」

――近年では、当事者の目線からの「世田谷区認知症とともに生きる希望条例」（20年施行）の策定に委員長として尽力しました。

一
目
指
し
た
の
は
こ
れ
ま
で
の

1940年 東京都生まれ。東京大学教養部の科学史・科学哲学科卒業後、63年に朝日新聞社に入社。84年に同社女性初の説説委員として科学、技術、医療、福祉分野の社説を担当。2001年の退社後、大阪の大学で教授などを経て、04年から国際医療福祉大学大学院教授、著書に『寝たきり老』のいる国（ない国）『恋するよに』ポフティヤをなど。東京都在住。

『認知症観を変える』こと。
認知症の方たちにも委員にな
っていただきました。認知症
の『サポーター』という上
から目線に感じるので、対等
な『パートナー』としました」

「これまでたくさんの方から、人々の思いを代弁し、社会を変えてきました。今、「本質を隠している」と考えている言葉、変えたいと思う言葉はありますか。」

「財政當局が考へた『國民負担率』（税と社會保險料が國民所得に占める割合）という言葉です。誰もが避けたい『負担』という言葉を巧みに使ひ、社會保障費を抑へ込むうとしてゐます。『國民負担』といひながら、家族の介護負担や教育にかかる費用などの國民の負担は除外されてゐます。『國民負担率』を低く抑へると、國民の負担は増えるのです」

「負担率」ではなく、『助け合い率』や『支え合い率』という言葉に変えたい。紙面でも訴えましたが、なかなか変わらない。これを変えることが宿願です」

「あるべき社会保障の姿をどう考えますか。」

「取材や、95歳で亡くなった母の介護を経験して思ふことは、人間にとって大切なのは『安心できる居場所』があり、『味方』がいて、『誇り』が守られること。そのために何が必要かを、当事者の立場で想像することが大事です。税金を『取られる』のではなく『預けて』、その実現のために使う社会になってほしいです」(田口谷優子)